

白氏文集 二十六 草茫茫

加藤 淳平

古への長安なる西安の、郊外に今も行かば、案内人、秦の始皇帝が廣大なる山陵を指し示す。規模餘りに大なれば、中國政府、未だ全體の發掘に着手せず。着手せば、直ちに國際的ニュースとならむ。周邊より掘り進め、發見せるが、彼の「兵馬俑」の大軍團なり。此の發見より、始皇帝が墓所の規模の大なるを想像し得む。墓所は、下に水銀を流せる海ありと、『史記』の記述にあり。是亦、想像を絶す。皇帝ならずとも、厚葬を競ふは漢民族の習ひなれど、白樂天の奢侈を嫌ふ、堅實なる貧家の出身者なればならずや。

草茫茫 懲厚葬也 草茫茫たり 厚葬を懲らす也

草茫茫 土蒼蒼 草茫茫たり 土蒼蒼たり

蒼蒼茫茫在何處 蒼蒼 茫茫 何處に在りや

驪山脚下秦皇墓 驪山の脚下 秦皇の墓

墓中下涸三重泉 墓中 下に涸らす 三重の泉

當時自以爲深固 當時 自から以爲 深固なりと

下流水銀象江海 下に水銀を流し 江海を象どり

上綴珠光作烏兔 上に珠光を綴りて 烏兔を作す

別爲天地於其間 別に天地を 其の間に爲す

擬將富貴隨身去 擬ふ 將に富貴を身に隨ひて去かんと

一朝盜掘墳陵破 一朝 盜掘せられて 墳陵破る

龍樟神堂三月火 龍樟 神堂 三月の火

可憐寶玉歸人間 憐れむ可し 寶玉の人間に歸するを

暫借泉中買身禍 暫らく泉中を借りて 身の禍ひを買ふ

奢者狼藉儉者安 奢者は狼藉せられ 儉者は安し

一凶一吉在眼前 一凶 一吉 眼前に在り

憑君回首向南望 憑はくは君 首を回し 南に向き望むことを

漢文葬在灞陵原 漢文葬むられて灞陵原に在り

(大意) どこまでも續く草原、土が青々と見える。そんな涯しない草原は何處かと云ふに、驪山の直ぐ麓にある秦の始皇帝の墓所である。墓の中には、三つもの地下水の湧く泉があつたのを涸らして固め、當時帝自身は、深く堅固な墓だと思つたに違ひない。傳へられる所では、墓の下部には水銀の河と海を流し、上部には光る眞珠を綴り合はせた太陽と月を掲げたと云ふ。別に天地を墓の中に作り、自分と共にこの世の富貴を伴つて、あの世へ行かうと考へたのだらう。しかしこの墓もある時盜掘に遭ひ、墳陵の構造物は破壊され、皇帝の柩も靈を祀る靈堂も焼かれて、火が三カ月燃え續けた。寶物や寶玉がまた人の世に戻つて來たのは氣の毒なことだが、暫く地下の墓地を借りて、身の禍ひを買つたやうなものである。贅澤で豪華なことをした者は亂暴な目に遭ひ、恭儉な者は安泰である。一つは凶、一つは吉、

まさに眼前にあるではないか。どうか君、首を回し南を向いて遠望して欲しい。質素な皇帝だった漢の文帝は、灞陵原に安全に葬られてゐる。

(平成二十九年十二月三十日受附)